

〔提 言〕

「新しい家族看護学」の今の時代に

神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野・家族支援CNSコース

法橋 尚宏

日本家族看護学会は1994年に創設されたが、第1回学術集会での家族看護学の幕開けに対するエンスージアズムは、いまだに記憶に新しい。その後、北米の研究者らを招聘し、頻回に開催した教育セミナーも熱気に満ちていた。翻って、現在のわが国の家族看護学は、北米から学ぶという「翻訳学問」「輸入学問」や家族療法学などの応用が主導であった段階から、これらを咀嚼し、すでに「自前学問」の段階に移行している。家族はその国や地域の文化や価値観などの影響を受けているので、わが国独自の「新しい家族看護学」の構築が不可欠である。

私事であるが、1994年当時の筆者は、本学会の幹事、新設された東京大学医学部家族看護学講座の助手であり、家族看護学を吸収する時代であった。現在は、本学会の理事ならびに国際家族看護学会(International Family Nursing Association)の理事を拝命し、現所属の教授として家族支援専門看護師を養成する立場となり、家族看護学を発信する時代になっている。振り返ると、本学会や家族看護学の発展の中で筆者も成長させていただいた。今後は、最前線で活躍しておられる諸先輩の教示を範としつつ、筆者のような中堅や若手の切磋琢磨が未来の家族看護学には欠かせないことを痛感する。

家族を対象とする家族看護学は、ひとを対象とする個人看護学とは異なるパラダイムをもつので、家族看護学独自の方法論が不可欠である。そこで筆者は、家族機能学研究を推進し、家族支援のための新しい理論構築とその臨地応用に挑戦しており、国内外での家族ミーティングならびに家族エスノグラフィーなどによる知の集積に立脚した「家族機能学」「家族症候学」「異文化家族看護学」など、独自領域を開拓している。とくに、家族看護学のパラダイムを明確化するための「家族システムユニット」「家族

環境」「家族システムユニットの成長・発達区分」、効果的な家族支援を裏打ちするための「症候別家族看護」「経過別家族看護(予防期家族看護, 急性期家族看護, 慢性期家族看護, 終末期家族看護)」など、新しい概念や方法論などを創出している。

家族看護学は長足の進歩を遂げているが、まだ解決すべき課題は多い。例えば、家族看護学研究をしようとする、家族の範囲を同定することが困難であることに直面する。筆者は、家族とは「家族であると相互に認知し合っているひと(生者)の小集団システム」であると定義しており、これは家族看護学ではコンセンサスが得られているものであろう。しかし、ある家族の各家族員に「だれが家族員ですか」と問うと、家族員によって返事が異なることが往々にしてあり、家族の範囲を同定することは容易ではない。家族看護学は家族を対象とするパラダイムをもつにもかかわらず、とくに質問紙を用いた量的な家族看護学研究では、家族員間で家族の範囲が異なるときに、どのように家族を同定してユニット研究を行っているのかが不明瞭である。今こそ、家族看護学が依って立つパラダイムに回帰し、これをレビューしなければならぬと考える。

世界の動向をみると、2005年に泰家族看護学会(Thai Family Nursing Association)、2009年に国際家族看護学会が創設され、家族看護学への社会的期待が高まっている。日本家族看護学会会員がリーダーシップをとるべき領域は、家族看護学の発展にともなって複雑化かつ拡大している。また、家族そのもののありようが時代と共に常に変化するので、家族看護学も常に変化する必要に迫られている。そこで、世界の中のわが国の家族看護学を見定め、次のさらなる飛躍に向けて、わが国独自の「新しい家族看護学」の確立に邁進し続けなければならない。